

終章：10年目、これからの課題



「街づくりの中の学校」を住民の手で

少子化にともなう学校の統廃合が進み、校区が広範囲になる中で、地域の緊急避難所としての役割が問われる結果になっています。また、被災地の空地に建てられたマンションの結果、児童数が増え続け、空き教室どころか、プレハブ教室建設の必要が出てきたところもあります。

このような動きを市民レベルで、その地域の実態に即した街づくりの中で、学校の建設計画などを再検討する必要が求められます。

また、神戸市教育委員会は、右記のような記事に見られるように、今後10年間で、学校の耐震構造化の予定を発表しました。本来これまでの10年間のうちになされなければならなかったこの事業が早急に進められるように、市民レベルで見守る必要があります。

子ども達がしっかりわかる学習ができるよう「30人以下学級」の実現、地域の一人暮らしのお年寄りを含め、住民同士のコミュニケーションがはかれる地域づくりなど、子ども達が、将来に渡って、希望を持ち続けられる街づくりなど、教育環境づくりの検討が常に住民として話題にされることが求められます。

市民が繋がるために⇒「神戸子どもと教育ネットワーク」発足

教育の課題は、地域と学校が共に連携して支えあって解決する時が来ています。そんなネットワークづくりをして、お互いの情報交換、学びあい、交流しあって、子ども達の未来を明るくする取り組みを一步でも進めてみませんか？そのためのネットワークが出来ました。

「神戸・子どもと教育ネットワーク」(通称「3Kネット」)です。

発足して1年、さらに充実した活動を予定しています。子どもの未来を明るくする企画なら、創造的に実行したいネットです。あなたの参加を呼びかけます。詳しくは、下記へ連絡ください。(資料をお届けいたします。)

〒650-0011 神戸市中央区下山手通4・13・9中尾ビル502号・神戸・子どもと教育ネットワーク (TEL/FAX: 078-391-1245)

次回運営委員会⇒3月21日(月)pm6:30～上記事務局(参加ご希望の方は、連絡ください)

お知らせ

講演・片山善博・鳥取県知事来演!!

◆日時 2005年4月24日(日) 午後1時～5時

◆場所 神戸市勤労会館大ホール

「大震災10年と災害列島」に寄稿していただいた鳥取県の片山善博知事においでいただき、この10年の兵庫・神戸の復興・再生を検証します。

兵庫県震災復興研究センター

大震災10年の復興・再生を検証する



神戸市

耐震基準が改定された一九八一年以前に建てられた市立小・中学校について、矢田立郎神戸市長は十四日、今後十年間で耐震化率を100%にする方針を明らかにした。来年度から耐震工事が必要な五百五十九棟の補強工事に着手。事業規模は約三百五十億円になる見込み。矢田

今後10年で全校耐震化

子どもの安全守れ

市長は同日の会見で、「学校施設の耐震化は児童、生徒の安全確保につながる。地域の防災拠点にもなり、優先的に取り組まなければならない」と説明した。神戸市内の小・中学校の校舎や体育館などは計二千四百一十一棟あり、うち八一年以前に建てられたのは八百十九棟。現在の

耐震化率は約40%にとどまっている。五百五十九棟に補強が必要とみられ、来年度から五年で耐震化率を80%に高めることを目指し、三百三十二棟を集中的に工事する。残る五年で二百三十七棟の工事を進める。耐震化率の全国平均は二〇〇四年四月で、49.1%。

被災地だより

これ以上人災による犠牲者を出さないために
強力な絆を避難所になった神戸の学校現場から全国へ



10年目を迎えて

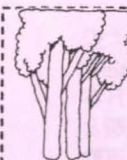


第25号 2005・3・17

全教神戸市教職員組合「絆編集係」神戸市中央区下山手通4・13・9中尾ビル3F・

TEL-078-391-7508・FAX-078-391-8549・〒振込口座番号 01170-7-29732

最終号



これからの災害に備えるために
「学校の安全を守るのは？」



最終号に寄せて

被災地だより「絆」の最終号25号をお届けします。25号で、学校現場からの発信「絆」の発行は、終わりますが、この号に寄せられた原稿から、これまでの取り組みの問題点を検証し、新たな課題を提案します。「子ども達の安心と安全を保障する学校づくり」は、学校現場だけでは、背負いきれないものになっています。今「子ども達の抱えている問題」を知って頂き、学校現場とそれぞれの地域社会で、共通の理解を深め、市民一人一人の問題として、それぞれ、何ができるか、今後とも検討し、共に連帯して行動できるよう呼びかけるものです。この号は、その出発の機会にもしたく思います。

「絆」発行の主旨を振り返って

(1) 冊子「学校防災」で、提言を発信

10年前、未曾有の大震災で、6433人の犠牲者が出、積み上げた神戸の街が一瞬にして崩壊してしまいました。その直後から、学校が、長期の避難所にならざるを得なかったのは、「これまでの街づくり」への大きな反省を迫られるものでした。市民にとって、安心と安全な街づくりではなかった…。学校が、本来の子ども達の安心と安全の場になるためには、どのような条件が必要か？学校現場から提言を発信する必要に迫られ発行されたのが、冊子「学校防災」(右記)でした。

学校防災



神戸新聞総合出版センター
発行

(2) 震災1000日経っても、進まない復興に、さらに学校現場からの発信を続ける必要から、被災地だより「絆」の発行が始まりました。

震災から3年経っても、復興が進まない、その原因が、震災前と同じ、延長線上の街づくりが進められていることにある……。震災の教訓が生かされていないことが、はっきりしてきました。住民の意志を大切にしたい街づくり、市民一人一人の安心と安全を保障した街づくりが、結果的には、子ども達にとって「安心な学校」になる…。この教訓を、叫び続ける必要から、被災地だより「絆」が発行され、回を重ねて、25号の発行になりました。

ご理解とご協力有難うございました。

この号を含み、これまでの「被災地だより絆25号分」は、神戸大学震災資料図書館へ保存されています。必要に応じて「資料」として閲覧頂ければ有難いです。また、これまでの「絆」を、お求めになりたい方は、「全教神戸書記局」へご連絡ください。手元の分をお分け出来る範囲で、ご相談に応じたいと思います。被災地だより「絆」に貴重な原稿を寄せて下さった多くの方々、また、長い間、お読み頂いた方々、本当にご理解とご協力有難うございました。

2005年3月 「絆」編集担当；池見宏子

(3) 10年目に見えた課題



10年経って、はっきりしたことは、「子ども達の安心と安全は、学校だけでは、守れない。『地域住民の命を大切にしたいコミュニティ社会をつくること、そんな中に建てられた学校が、子ども達の安心と安全を保障できるものになる』」ということでした。

10年を迎えた今、果たしてそのような街づくりが行われているのでしょうか?

今号では、それぞれの執筆者(敬称略)を通して検証し、新たな課題をその中から見つけます。

検証1「弱者が大切にされた復興がなされたか?」⇒「被災者の険しい道をこれからも歩み続けます」

安田 秋成 (阪神・淡路大震災被災者ネットワーク)

* 仮設での孤独死の実態などをずっと訴えてこられた安田秋成さんは、国連人権委員会へ、その声を届けました。このことは、世界は、私達、被災者の味方であることに確信を持ち、子ども達の未来に勇気を与えるものとして、この被災地だより「絆」にも掲載してもらいました。日本政府は、十分な回答をしないまま現在に至っています。憲法の基本的人権、生存権を問う問題として、これから、災害が起こった時の補償問題に生かすためにも、ますます、安田さん達の運動を支え続けたいものです。

検証2「子ども達の震災の影響は?復興担当教員が引き上げられようとする中で」

⇒「今なお、親の苦悩を背負う子ども達」中野 照雄 (神戸市立明親小学校)

* 全教神戸の現執行委員長でもある中野照雄さんは、震災当時、ポートアイランドの仮設住宅を校区に持つ港島小学校で復興担当を務め、その後、兵庫区の被災地明親小学校でも、復興担当を務めながら、子ども達の家庭の厳しい実態を見て来ました。そして、全教神戸が、常に、市議会に対し、「復興担当教員の継続」、「子ども達の安全と安心のための学校の条件整備・30人学級」を訴える先頭に立って来ました。今後もその運動を広く市民に訴え、市民運動として継続していく事が課題です。

検証3「自然災害の情報公開と、理科教育の改善がなされているか?」⇒「10年経っても、繰り返される人災、今こそ、自然科学をすべての人々のものに(災害が起これば、警告して土地)」

小川 嘉憲 (西宮市立瓦木中学校)

* 日本人の学力水準が低下している事がクローズアップされています。その中でも、科学・理科教育のレベルダウンが懸念されています。阪神淡路大震災直後、神戸市民は、その事に気付き、警鐘を鳴らしたはずですが、この被災地だよりでも、何回か「理科教育の大切さ」について、シリーズを組み、訴えました。今回は、そのまとめとして、小川嘉憲先生に原稿を寄せてもらいました。早、10年の歳月が経ちました。10年前の訴えが新鮮に蘇ります。これからの災害に向けて、市民レベルで「科学的な見方」を学習する事が課題です。

検証4「教育現場で、命の大切さをつなぐ実践が行われているか?」

⇒その1「直接記憶にない被災地の子ども達に、風化しない取り組みを」

北河 豊治 (神戸市立向洋中学校)

その2「命の重みをかみしめ、その思いを一人一人の作品に込めたレモニに」

神吉 修 (加古川市立山手中学校)

その3「未来に繋ぐために『国際防災子ども会議』を通して」

長田 寿和子 (神戸市立湊中学校)

* 被災地でありながら、震災を知らない子ども達が増えて来ました。ともすれば、暗くて、重くて、つらい過去について思い出したくない被災地です。しかし、風化してしまう危機を感じる被災者が、何とか、その教訓を次世代に伝えたい、と取り組んでいる実践のいくつかを紹介します。これからも、「若い語り部」が育つ工夫が求められます。

検証5「10年目に行われたレモニ、被災者の思いを繋ぐイベントは?」

⇒その1「手づくりイベントーグッド・モーニングコンサートを企画して」玉川侑香 (詩人)

その2「1、17早朝登山に参加して」桑原 敦文 (神戸市立福住小学校)

* 被災者自身が、「お互いに支えあって、元気に生きる」震災当時のパワーが、10年経ち、復興の格差がますます大きくなる中で、また、経済的不況、不安で危険なニュースが続く中で掻き消されそうです。あの時の原点を大切に、励ましあって生きていく姿が、子ども達への何よりの夢と希望を与えるものです。そんな勇気を与えてくれるレモニのいくつかを紹介します。

検証1「弱者が大切にされた復興がなされたか?」

⇒「被災者の険しい道をこれからも歩み続けます」

安田 秋成

(阪神・淡路大震災被災者ネットワーク)

生きるために絆が大切

あの日から10年、HAT神戸復興住宅に住む、前田ミカさん(92歳)は、「くたびれ果てる程長かった、海の上をさまようような毎日だった。」この住宅に入居して7年近くなるのに友だちは、一人もいない。「死ねないから生きているだけ」と言います。

復興住宅の高齢者率は、50%を超え、高齢単身世帯は、38%になります。自治会や支援者が努力しても、孤独死381人—自殺者40数名を含む—(1998年~2004年12月まで)、家賃が払えず強制退去者360余世帯、この数字が復興住宅住民の暮しのきびしさを物語っています。

「生きて仮設を出よう」が合言葉だった、苦しく不安だった仮設の暮らしを、助け合って耐えてきました。それをなつかしく思う人も大勢います。

人が生きていく上で、人と人のつながり「絆」がどんなに大切なものかを示しています。

市民・被災者不在の復興

震災ですべてを失った時、「助かった命、大切に生きていこう。」と、人はやさしく、思いやりがありました。ボランティアは、親切でした。行政の現場、職員の多くは、被災者と同じ目線に立っていました。

しかし神戸市長は、「都市計画」「再開発」方式を提起し、「空港建設」「産業基盤、強化」の重点方針を固め、市幹部の態度は、急速に変化したのです。自治体として第一に考えるべき、被災者の生活再建は、なおざりにされました。



ポートアイランド仮設住宅で住民が孤独死。手を合わせる自治会の人

新潟県中越地震で、山古志村は全村壊滅、全員避難という大災害となりましたが、仮設住宅で、村長と住民が膝つきあわして、古里の再建を論議し取りくんでいます。神戸では、市長は、仮設住宅の一ヶ所に一回行ったきり、5年余りの間、孤独死など困難な問題が、生じたにもかかわらず、仮設を訪れることは、ありませんでした。復興住宅は埋立地、開発造成地、工場跡地に建て、「元の街に帰りたい」という被災者の願望は、無視されました。

元の街は、二度つぶされた

私達の街は、二度にわたって潰されたのです。地震などで潰れた街は、人間にその意志があれば、復元は可能です。しかし、都市計画、再開発で高層ビル、マンションが建ちならび、鉄筋コンクリートで固められた街は、二度とよみがえることはないのです。被災者、市民の心のよりどころ、元の街を潰して、どうして復興といえるでしょう。露地も植木、花もなくなり、遊びの空地もなく、思い出の消えた、風情も懐かしさも失ったコンクリート・ジャングルで、人間は、どのように育つのでしょうか?「住宅再建支援」「仮設住宅」現地建設ができていたなら、「元の街」はある程度、残すことができたでしょう。

古里を取り戻すために、険しい道をこれからも!

この10年、地震、噴火、水害などで自然災害が続いたにもかかわらず、政府は、住宅本体の再建支援を実現していません。鳥取県の片山知事が住宅再建の金字塔をうちたて、八つの県が続きましたが、肝心の兵庫県知事は、口を閉ざしています。被災者ネットワークは、これからも、険しい道を行きます。



HAT神戸・灘の浜
神戸市、都市公園、兵庫県による復興住宅(賃貸)

検証2

「子ども達の震災の影響は？復興担当教員が引き上げられようとする中で」
⇒「今なお、親の苦悩を背負う子ども達」

中野 照雄（神戸市立明親小学校）

震災直後、人々は温かかった！
忘れられない！「1杯の水のありがたさ」

地震のすぐ後、私の住んでいる地域は、水道の水が1週間ほど出ませんでした。飲み水を何とかしなければと思い、小学校に来てくれた給水車の水をもらいに、鍋をもって急いで出かけました。しかし、給水車の水は、すでになくなっており、空の鍋をもってとぼとぼと家路についていたとき、その姿を見た近所の方が、もらった水を半分わたしに分けてくれました。ありがたかった。わたしはお礼を言って、もらった鍋半分の水を大事に家にもって帰りました。わたしの家では命をつなぐことができた「いのちの水」でした。この時の鍋半分の水が、どんな高価なお歳暮よりもありがたかったことを今も覚えています。

当時、復興担当教員として被災した子ども達と関って

さて、わたしは、ポートアイランドの港島小学校で3年間（1998～2000年）、兵庫駅の南の明親小学校で1年間（2002年）復興担当教員を経験しました。

ポートアイランドには、仮設住宅が、3000戸建ちました。ポートアイランドは、倒壊した家屋はなく、心のケアの必要な子どもは転入生に多く、中でも仮設住宅から通う子どもが主でした。仮設に入居し、夫婦で助け合わねばならない時に夫婦間がうまくいかず離婚し、父親が、3歳の妹、1年生の弟、3年生の兄を育てる育てることになったケースがありましたが、衣食住の基本的な事を学校にまかせるといような、それは大変な状態がありました。地震で家の下敷きになって、数時間後助け出された時、しばらく声が出なかった子どもなのですが、数年たった時点でも、担任とは話ができるのですが、みんなの前では、声が出なかった子どもがいました。

10年経った今も、「ケア」の必要な子ども達



震災の後遺症の大きさは、震災の年に生まれた子ども達にも及んでいます。震災の年に生まれた子ども達は、今、小学校4年生になっていますが、問題行動をみるにつけ、震災とのかかわりをぬきにして考えることはできません。

それは震災後の家庭環境の変化によって、子ども達は、健全な育ち方から疎外されてきた状況があるように思います。家が全壊し、借金をして、少し遠い所で、家を買ったものの、父親が病気になり、母親が昼も夜も働かねばならなくなりました。そのため大事な幼児期を祖母にまかせっぱなし（放任）となった事例があります。また、家が全壊してから父親がいなくなり、母親は、子どもとべつたりの子育ての中で、母子分離不安の状況が起こり不登校になった事例など、小学校に入ってから、問題行動の数々は、幼児期の育ちに問題があることが分ります。

震災で家が全壊したことなどが大きな原因となって、親の人生が尋常でない苦悩を抱え込むものになり、それを子ども達が背負って育ってきており、その後遺症は、重く今も続いています。



ポートアイランド南の埋立地に建てられた
仮設住宅・北側に遊園地の観覧車が見える。

検証3「自然災害の情報公開と、理科教育の改善がなされているか？」

⇒「10年経っても、繰り返される人災、今こそ、自然科学をすべての人々のものに（災害が起これば、警告してた土地）」
小川 嘉彦（西宮市立瓦木中学校）

1. 新潟県中越地震も警告されていた。

「信濃川断層帯もA級」「この断層帯の南西の端で善光寺地震(1847年)が起こったので、続発性という考えからのこりの(北東)部分は気をつけるべきだ」「小千谷市や長岡市あたりは油田地帯で、長岡地震や関原地震という非常に浅い地震が起こっています。褶曲運動で地震が曲がるのにもなって岩盤がすべった活褶曲の地震です。」「(活断層) 松田時彦著、岩波新書・1995) (右記の写真)

新潟中越地震が起こった時、「あ、そういえば予測されていた。」と思い、上記の本を取り出し確かめました。あの「兵庫県南部地震」の後、「活断層」が流行語になり「多くの人が自分の住んでいる土地は大丈夫か」という不安に答えて出版された本です。



図41 内陸の主要断層(1～7は活動期が近い、7～11は続発性。
1: 中央構造線、2: 有馬-高槻-六甲断層帯、3: 阿寺断層帯、
4: 伊那谷断層帯、5: 糸魚川-静岡線、6: 富士川断層帯、
7: 国府津-松田-神崎断層帯、8: 柳ヶ瀬-安芸断層帯、9: 西
関東断層帯、10: 信濃川断層帯、11: 北山利断層帯)

全国の活断層を活動度でABCで分け、断層の特徴や地震が起こる確率などが記されています。その本の「内陸の要注意断層11本」の中に入っていました。

しかも「活褶曲」という一度地震が起これば続いて起こる独特な地域でもあり、150年前に南西端で「善光寺地震が起きた」から北東端の地震の可能性が極めて高いとありました。地震の性格まで今回の中越地震を予測しているのです。もちろん予測なので100年単位の危険度ですが、でも科学者がここまでわかり出版し明らかにしているのに、行政や関係機関はもちろん多くの人は全く対策を取っていませんでした。「いや、知らなかった」「関心がなかった」「さししまった問題と思わなかった」ということでしょう。

そこには経済効率優先など様々な問題がありますが、私は「国民の科学水準」を問題にしたいと思います。科学情報を「受け止めて」「自分の頭で判断し」「必要な行動をする」能力が一般的に十分育てられていないのではなにかと強く思いました。



2. 「阪神間は地震がない」はウソだった？

兵庫県南部地震が起こる前、阪神間の多くの人々は「ここはええとこやで、人情は厚いし、気候はええし、地震はないし、こわいのは水害だけやな。」と言っていました。

震災の後、中学生達で調べました。彼らの疑問の第一は、「阪神間は地震がないと言われていたけれど、あれは、ウソだったのか」でした。そこで生徒たちと調べました。

校舎の屋上から六甲山を望むと緑の帯が手前から四つの階段になっています。緑の帯は、急な斜面です。地質図をみると斜面にはそれぞれ断層が走っています。断層のところで、ぐっと高くなっています。それも圧縮する力で上昇する逆断層です。この土地は東西方向の圧縮力によって階段状に上昇しました。力が加わって歪が耐えられなくなって岩石が壊れ地震が起きて上昇したのです。校舎から見えている六甲山は地震の化石だったのです。今回の兵庫県南部地震はその上昇運動の、一こまだったのです。

これらを調べた生徒たちは「阪神間に地震がないのはウソやったんや!」とまとめました。

でも人々ははどうしてそう信じたのでしょうか。

ある新聞記事を手に入れました。そこには「神戸に、近い将来地震が来る。研究者が予測!」と書いてありました。当時大阪市立大学の藤田和夫教授のグループが神戸市に対して、震度6程度の地震が来ることを警告し、都市計画は、これをもとに立てるべきだと進言していました。これに対して、市の担当者は、それではコストがかかり過ぎると言っていたそうです。「六甲山は過去100万年の間地震を繰り返しながら今の高さになった。このような地形では、空白域」と言って、近年大きな地震がないからこそ危ないのだ。」ということでした。

「阪神間に地震がないのはウソだったか」生徒みんなで議論しました。

「調べたら慶長伏見地震以来大きな地震はありませんでした。」「400年前にあったのなら、『あった』と警戒すべきだ」「親子3代くらい来なかったら『ない』と思うのは当たり前だ」と意見がでました。そして出た結論は、「逆断層によって上昇してきた六甲山地は近年地震がないからこそ危なかったのだ。」ということでした。「大地の変化のスケールは、1000年単位、人間はせいぜい100年単位、その違いがあるので人間の経験だけに頼ってはいけません。」「断層によって急な山になっている六甲山を見れば『地震はある』と考えるべきだ。」「地震が岩盤の破壊なら、断層の長さから地震の大きさが予測できたはずだ。」ということでした。

「経験に頼らず、科学を身につけて、これを使って判断していれば、地域対策は、もっとすすんでいたはずだ。」ということを経理科の授業で確認しました。

3. 兵庫県南部地震は避けられなかったが、阪神淡路大震災は、防ぐことができた。

昨年は「災害の年」でした。自然災害が世界と日本を襲いました。しかし今の科学技術の水準ならば十分避けられた自然災害が多かったと思います。開発優先、科学や効率優先の政治・行政の結果、治山・治水また地震対策がおろそかにされてきました。また地方や社会的弱者を大切にしない行政でした。

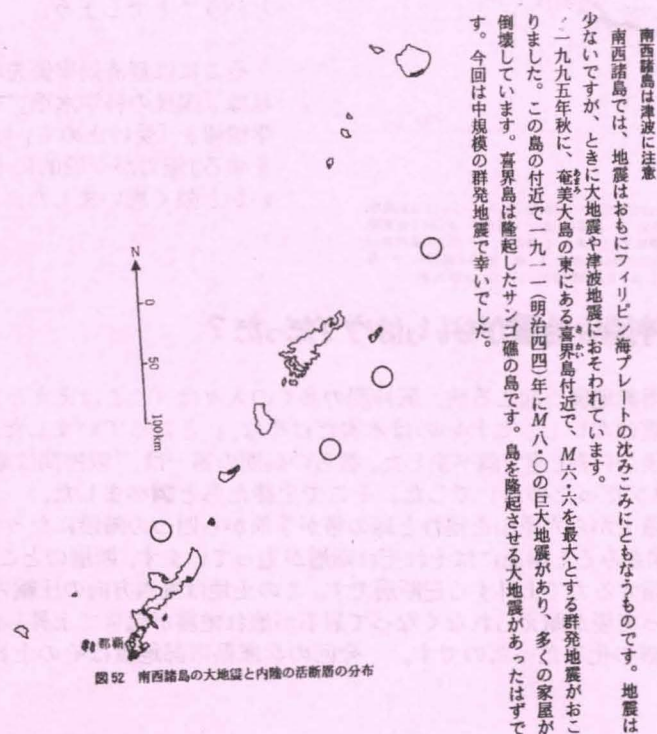
私の郷里は、但馬の豊岡市と周辺の町では、ほとんどが水害の被害を受けました。万年赤字の但馬空港を巨費を投じて建設した一方で、堤防は、数十年間修理せず古いままでした。そういう点では正に人災です。

でも、そんな行政・政治を許した住民の責任でもあるのです。そういう点では人々の科学的知識と批判的精神が必要なのです。阪神・淡路大震災の教訓は正にそこにあった、と思ったのですが、10年経っても、同じことが繰り返されていて大変残念です。

前述の本「活断層」に「南西諸島は津波に注意」「明和の大津波で石垣島の人口の約半分が失われました。津波の高さは、30~40mぐらいだったようです。」とあります。(右記)

スマトラ沖地震の結果起きたインド洋大津波と同じ規模のものです。インド洋大津波で、莫大な犠牲者を出した今、どうして「沖縄津波対策を!」という世論が起こらないのでしょうか?

やっぱり「すべての人々に科学を!」と叫ばずには居られません。



検証4「教育現場で、命の大切さをつなぐ実践が行われているか?」

⇒その1「今年も、課題学習の後、感想を聞くと!」

北河 豊治(神戸市立向洋中学校)

当時の話を聞く貴重な機会を得て、改めて、大変な状況を知って...



現在の勤務校は神戸市の東端の人工島＝六甲アイランドにあります。今年の1月17日、全校をあげて防災教育を行い、その中で、当時の自治会長(本校の第2代目PTA会長でもある)の方の話を聞く機会がありました。

10年前の1月17日直後から、この校区では、自治会や島内にある企業を中心としてさまざまな取り組みが進められました。その中にガスタンクからガスが漏れていて危険なので島の南部に住民が避難するという騒ぎがありました。

情報が錯綜する中、当時の区長や警察・消防関係者も緊急かつ苦渋の判断を迫られました。丁度、地元紙でもこの避難事件の経過が掲載されており、私も生徒とともに当時の様子を学ぶことができました。結果としてタンクの爆発はなかったものの、文字通り孤島の状態で、住民みんな、震災後の難局を乗り切ったそうです。

「避難訓練」の後、
「数学で震災を学ぶ授業」

さて、当日、地震を想定した避難訓練の後、元自治会長さんの話を聞き、今年も「数学で震災を学ぶ授業」をしました。以前、この「絆」でも紹介した1時間ものの「課題学習」です。

いろいろな手記を読み、神戸市付近の地質図を色で塗りわけ、日本海中部地震のデータを比例のグラフに表すという単純な作業でも、生徒には好評だったようです。

生徒たちの感想を紹介

・私は地震が起きたとき寝ていてよくわからなかったけど、あらためて地震の怖さが分かった。



・地震のことを忘れかけていたので、このようにふりかえてみてよかったと思います

・地震はいつ起きるかわからなくて、とても怖いと思いました。前もって荷物の準備とかをしておきたいです。

・埋め立て地や花崗岩、流紋岩がほとんどだとわかった。

・あまり覚えていないけれど、色々な資料を見て、すごくおそろしいものだったということが分かった。これからはこのおそろしさを伝えていかなければいけない。

・去年は、スマトラ沖地震という死者が約30万人にのぼったけれど、阪神淡路大震災の方が、情報などが遅かったし、食べ物をあげるのがおそかったし、苦労した日々が長かったのかなあと感じました。

・あんまり覚えていないけれど、一つだけ覚えているのは、地震の時、お母さんが俺を守ってくれた。タンスとか一応何も倒れなくてよかったけど、お母さんはすごいと思った。

・地震の直後、暗い部屋で机の上にローソクを立てていたことしか覚えてなくて、こんなにすごいことだと思っていなかった。

・小学生の話や、当時の様子を表した文を読んで、地震の怖さを思い出しました。

・グラフのことはよく分からなかったけれど、兵庫県内に、とても古い地層があることを知ってとても驚いた。

・震災のことはいまいっちょ覚えていない。マリノパーク(島の南端にある)で、でかいカニをとったり、タツノオトシゴがいたんですよ。(鯛と蛸で有名な明石でも同じようなことがあったそうです。)

・地震はとてもこわいものだ。人をとても悲しませるものなんだ。けど、死んだ人の分も生きよう。

・地震のことは風化させてはならないと思う。南海地震の発生が危惧される今、必要なのは個人の意識だ。

その2「命の重みをかみしめ、その思いを一人一人の作品に込めたレモニーに」

神吉 修 (加古川市立山手中学校)

生徒会が計画を立て、美術で作った作品を体育館に展示し、10年前の「あの日」と向き合うレモニーを今年も行いました。その様子をお知らせします。

それは「山手のつどい〜1・17大震災を忘れない〜」と題した生徒集会として行ったものです。まず、震災の教訓「命の尊さ」「思いやりの心」を目に見える形で、工夫を凝らしたオブジェとして会場の体育館に飾りました。1年生175人の描いた似顔絵は、震災の犠牲者6433人分の数に合わせたものです。その絵が体育館の壁伝いの床に並べられました。会場を照らし出した2年生183人が製作したステンドグラスのランタンの灯は、神戸市中央区東遊園地に

ある「1・17希望の灯り」から生徒会代表が採火したものです。そして、希望の象徴「ひまわりなど」が描かれた、三角形の震災フラッグは、3年生189人の製作したものです。そのように生徒全員による作品が展示された会場で、黙祷の後、被災者であり、詩人の玉川有香さんによる講演会が行われました。玉川さんの講演は、「町は崩れても、仲間の大切さを信じる事で、次の暮らしが始められる。」というもので、それは、「亡くなった方々の死を無駄にしないために、生きている者がどれだけ命を大事に生きていくか」を生徒達に考えさせるものとなりました。

その3「未来に繋ぐために『国際防災子ども会議』を通して」

長田 寿和子 (神戸市立湊中学校)

1・はじめに

災害が多い中で、子ども達の受難時代を危惧

2004年度は世界の災害数が例年の3倍になっています。昨年の暮れ、しかもイランのバムの地震が起こったのと同じ12月26日にスマトラ沖地震が発生し、それによる津波の被害などで21万人以上の死者が出ています。日本人の犠牲者も増える一方です。新潟中越地震被災地域では寒い避難所でお正月を迎えた方も多かったと思います。また日本やイランの時には話題にもならなかったことが、スマトラ沖津波の被災地の子ども達の人身売買の問題が浮上しています。これから子ども達はますます、受難の時代になる事が危惧されます。

2・ご案内 「防災世界子ども会議」

今回は阪神・淡路大震災10周年記念事業のひとつ「防災世界子ども会議」について紹介します。世界54校1000名以上の子供達がこの防災プロジェクトに取り組んでいます。現在被災者へのメッセージや募金集め、防災に関する研究発表などがメールや掲示板を使って交流されています。そのうち12カ国から子供達と先生達が参加し、3月25〜28日まで、淡路夢舞台や兵庫 JICA を中心として、

防災世界子供会議が開かれます。(詳しくはインターネットホームページをご覧ください。)

アドレス⇒<http://ndys.jean.jp/ja/index.html>

この企画の中心になっている組織が世界100カ国以上7000の学校で70万人の子ども達がインターネットを利用して交流を進めている I EARN の日本支部 JEARN (Japan Education and Resource Network) です。様々なプロジェクト学習を組織し、生徒の学習を支援している組織で、このプロジェクトもそのひとつです。そして、私がコーディネーターをつとめる願いコネクションもそのひとつです。

http://www.jean.jp/2003conference/nagai/index_j.html 全教神戸では、私と池見さんがこのプロジェクトに関わり、神戸からの発信を続けています。池見さんは「神戸のなちゃん」を世界に紹介しました。(インターネット、ホームページを覗いてみてください。⇒<http://ndys.jean.jp/ja/school/kobenaocyan.htm>) それに対して、イランやセネガルのメンバーから早速反応があり、イランのバムでもひまわりの取り組みを紹介するとか、このお話を広めるとかの話題が出ています。

3・神戸市立湊中学校の取り組み

神戸市立湊中学校では、当時3、4、5歳だった子ども達ですが、地震のことはくっきりと記憶に残っている生徒が多いようです。中には数時間がれきの中に生き埋めになり、クラッシュ症候群になった生徒や、失語症になった生徒もいます。9月29日には国連平和デーに協賛し、環境プログラムを発信しているENOという教育ネットの指導の元、地球規模で環境、命、平和を守ろうというテーマで校庭に植樹をしました。12月には人と未来防災センターの資料をもとに防災クイズを作成し、防災への意識を高める授業を持ちました。また予想される東南海地震や津波などの学習をしました。1月17日には地域割りのグループで避難訓練を行い、連絡系統をシミュレーションする訓練をしました。このように、世界と日本の被災地の子ども達が災害について交流し、これからの防災について考

え、3月淡路で宣言を発表します。子ども達の宣言は、大人の課題でもあります。成功のためのサポーターを募集中です。【詳細と申し込み⇒〒651-0085 神戸市中央区浜辺通 4-1-23 三宮ベンチャービル503 JEARN・神戸事務所内 (NDYS 事務局 Natural Disaster Youth Summit) 実行委員会事務局 TEL&FAX 078-251-6833】

検証5「10年目に行われたレモニー、被災者の思いを繋ぐイベントは？」

⇒その1「あれから十年 ぐっどもうにんぐコンサート」 玉川 侑香 (詩人)

10年目を、「コンサート」で迎えるために

震災から十年目を迎えるこの年、今、私たちは、「あの朝から十年、ぐっどもうにんぐコンサート」の準備に大わらわである。震災で出会った詩人と作曲家、そして歌い手、演奏家、それらが勢揃いしての大舞台なのだ。それを裏で取り仕切るのが「創作ぐるーぷ965 (くろこ) の会」つまり会場交渉、チラシ、プログラムの印刷、会場設営、ピアノ運び、看板書き、受け、売り子、一番大きな役目が聴衆集めである。

「Kさん来られへんねんてー」

「えーっショック！ けどYさん二人つれてきてくれるって」

「やあ嬉しい！これで何人目!?」

チケット番号の数字を花まるで埋めていきながら一喜一憂の毎日なのだ。絶対赤字は出せない。いや、それ以上にこのコンサートを成功させたい。それが私たちと演奏家たちとの十年の絆の到達点なのだ。そう思うといつも立っていられない「965 の会」のメンバーたちである。

メンバーの出会い…10年前

出会いは、十年前にさかのぼる。「イモトのおっちゃん」という震災直後に書いた私の詩に曲をつけたという申し出が作曲家の中西覚氏からあった。どうみても歌になるとは思えない詩を捉えて、見事に関西弁で作曲してしまったのだ。それは、いつも喫茶店で出会うおっちゃんが震災の火事から生還し、なじみの客たちがおっちゃんに拍手を送る、水害、戦争、原爆をくぐりぬけ働き続けた五十年の半生、またすべてをなくしたけど命があって、いつものコーヒーが飲めることを喜ぶ—そんな語りの詩なのだ。歌い手は

バリトンの岡田征士郎、その歌い手のみごとせつかくできたこんな歌が舞台の上だけではもったいない。街の中でコンサートをやろうと企画したのが画家のM・吉崎、アートフラワーデザイナー、それぞれ自分の持つ表現で震災を語りたい、それで立ち上がりたいと思っている仲間だった。そこへ書家が変わり演劇人もきた—それは96年5月に生まれた会、つまり「965 (くろこ) の会」と名付けたのである。

そのコンサートは岡田征士郎氏、ピアノ田淵幸三、震災直後に会った津軽三味線の久保比呂誌、初めて詩の朗読に立ったわたしも入れて、涙、涙のコンサートに終わったのだ。音楽というものがこれほど人の心を癒すものかというものを改めて知った。来場者の感動した姿を見送りながら、私たちはこれからは人の心にも自分の心にも灯をともしことを続けていこうと決心したのである。

10年目の企画

あれから十年、詩ができ、曲がつき、新しい歌い手や演奏家と出会い、合唱団と共に自作詩をうたう日もあり、965のメンバーもそれぞれに自分の分野で個展を開き、ジョイントし、様々にからみながら歳月が流れたのである。

今回のコンサートは、私たちの出会いの原点と、そこから今日までをつないできた流れの中で出会ってきた人々との一大ジョイントの日なのである。—私たちが伝えたいもの、それは「生きていてよかった」と言える日のために、「命よ、傷つかないで」と叫び、歌いたい。それはいつの世にも言えること。震災を通して知った者のメッセージだから。



「ぐっどもうにんぐ
～阪神大震災一九九五年一月十七日の記憶～」

FMC-5035 (税込¥2,940) (ご希望は、書記局まで)

作曲：中西 覚 詩：玉川ゆか・飯島和子・伊勢田史郎 バリトン：岡田征士郎
ソプラノ：水澤節子 ピアノ：伊藤 勝・江頭義之 朗読：須永克彦



「震災」、その活動の 出発点の場所

私は、1月17日の早朝追悼集会には、特別な思いを持って参加している。

震災の日、自宅から中央区まで、この諏訪山ピーナスブリッジそばの再度ドライブウェイを車で走った。

山道をふさぐように、大小さまざまな岩がゴロゴロころがっていた。山越えして見えた街は、朝9時ごろというのに暗雲が立ち込め、煙も立ち昇っていた。異様な臭いもしていた。ただならぬ気配だった。自宅の被害は少なく、ラジオの情報しかなかったのも、凄惨な震災の状況を目の当たりにしたのは、この再度ドライブウェイ・諏訪山からだった。

まさに、ここが、私にとっての震災ならびに復興支援活動の、出発点とも言うべき場所だ。

5時46分。街の灯りの光と影は、参加者の口を重くする。いろんな思いが、頭を駆け巡るのだろう。みんな静かに見つめている。私も、この街の灯りを見る時に、いつも決意を新たにしている。まさに、特別な時間だ。

今年も、山頂で 冥福を祈る。

そして、これからも……

早朝の集会は、寒い。木枯らしが頬を刺すような時も、小雪が舞う時もあった。

10年目の今年は、初めて冷たい雨が降った。凍える体は、いつも農民連の炊き出し豚汁が、暖めてくれる。

集会では、私も亡くなった教え子や保護者の冥福を祈り、献花をする。そして、誓う。「国の責任で被災者支援と人間本位の復興を！」「天災に強い街づくりと住む人々の連帯を！」「13歳で逝った子の思いを受けとめ、語りつぐ教師で！」……。

この追悼集会が続く限り、これからも参加したいと思っている。

音楽法要「震災10年手づくり市民追悼式」に参加して

阪神淡路大震災被災者ネットワークなどでつくる実行委員会主催の追悼式は、1月17日、県私学会館にて行われました。震災犠牲者、関連死者を追悼するため、立派な祭壇が設けられ、参加者の献花の後、僧侶のNPO法人「ボランティアネットワーク EARTH(アース)」の方々による声明(しょうみょう)と琵琶の演奏が奏でられた音楽法要でした。誰でも参加できる手づくりのぬくもりを感じる市民追悼式でした。会場からは、すすり泣きの声“も聞こえました。

実行委員長の安田秋成さんは、「被災者生活再建支援法は改善されてはいるが政府は、住宅本体への支援は未だ認めていない。支援法の充実こそ生き残った私達の責務」と訴えました。亡くなられた方々の死を絶対、「無」にしてはならない、と心を新たにしました追悼式でした。(一参加者より)



「国連防災世界会議」より

1: はじめに(開催の意義)

(2005・1・18~22)

阪神淡路大震災10年目の2005年1月18日~22日まで、「国連防災世界会議」が神戸市で開催されました。「阪神・淡路大震災の教訓の発信」「世界の災害」「いのち」「くらし」「まち」「減災社会に向けて」等をテーマに、9つのセッションが持たれ、それぞれに提案者、パネル討論などが展開されました。当初、震災10年目の復興の幕引きのイベントとして、イベント的色彩が濃いものにならないかと心配されていました。しかし、前年12月のスマトラ沖地震での大災害が生々しく、予想されるこれからの災害に備えての真剣な話し合いの場とならざるを得なかったようです。改めて、この10年の復興の歩みが検証され、まだ復興半ば、課題を抱えてのこれからが話し合われた事は意義が大きかったように思います。特に、予想される大災害は、一国で防げるものではなく、世界各国が情報も含めて協力し合うことの大切さがクローズアップされました。



2: 「いのち」をテーマにした第4セッションに参加して

特に、ユネスコからウォルター・エルグリン事務局長による講演が印象的でした。世界の災害の要因は人口の増加、集中、開発問題、それによる人為的気候災害、貧困、途上国に被害が集中している事に警告を発しました。それに対して、災害におけるリスクを正しく理解する事、そのプロセスを学習し、災害シミュレーションの中から防災教育に役立てる事の大切さを言われたように思います。防災教育の大切さ、それは、基礎的な教育水準を高める事の大切さと、専門的な研究を深め、共通の価値を維持することの緊急性、そして持続的開発に関する防災教育のあり方が語られました。

その後、事例発表、パネルディスカッション等が行われました。話し合いの中で披露された「防災いろはカルタ」は、防災教育の7か条として、次のように、その要点がまとめられたものになっていました。

「防災いろはカルタ」(防災教育7か条)

- ①…命の尊さ教えるからは、命を守るマニュアル持とう
- ②…論より証拠、災害の歴史に学ぶ知恵こそ大事
- ③…防災のパターンを変えて防災訓練、シミュレーションがマンリ防ぐ
- ④…人間の生き方、あり方、考えよう阪神淡路の尊い教訓
- ⑤…防災は、家庭と地域と連携で、子どもの学びが地域を変える
- ⑥…平素から備えがものという初動態勢、カギは、教師の共通理解
- ⑦…登下校学びが問われる防災行動、自らの命、自ら守る子に



講演するユネスコ代表

3: 目を引いた「展示ブース」

上記のような、テーマごとのセッションが持たれた一方、総合防災展が開かれ、展示ブース、企画、ポスターセッションなどで、様々な趣向を凝らした各国、グループ、各団体によるアピールがなされました。その中でも目を引いたのが、兵庫県震災復興研究センターによる「震災復興の光と影」展示ブースでした。この10年間の復興の歩みを徹底して被災者の立場に立ち訴えるコーナーは、この一角だけのように思いました。その展示パネルの訴えを紹介します。

震災復興の光と影 「兵庫県震災復興研究センター展示ブースより」

阪神大震災の後の復興は「創造的復興」というスローガンのもとに進められた。この復興には、10年間で総額16兆円の資金が投下された。多額の資金は道路や鉄道港湾施設などに使われたため、インフラストラクチャーは、早く復興できたが、中小企業や商店の売上の回復などは遅れた。また、個人の住宅の確保も、困難をともに遅れた。持ち家を再建した人の多くは、二重ローンを抱え込んだ。復興公営住宅が25000戸建設され、低所得者が入居した。



「いまだ復興ならず」と訴える「ブース」

復興公営住宅は、新しく、家賃も安いので、多くの入居者は、建物には満足しているが、彼らの生活は、ハッピーではない。なぜなら、居住者の多くは、従前居住地から遠く離れた団地に住む事を余儀なくされ、そのために、コミュニティを失ってしまったのである。仮設住宅と復興公営住宅での孤独死は500人以上にのぼり、なお増え続けている。

このような光と影が生じた原因は、インフラストラクチャーの復興には、すばやく資金を投入したが、個人の生活復興には、公的な支援がなされなかったためである。災害からの復興には、すばやく資金を投入して、個人の生活をはやく震災前の状態に戻す事が必要である。